

満願寺跡出土陶磁器からみる日本海貿易

竹 村 亮 仁

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

満願寺跡出土陶磁器からみる 日本海貿易

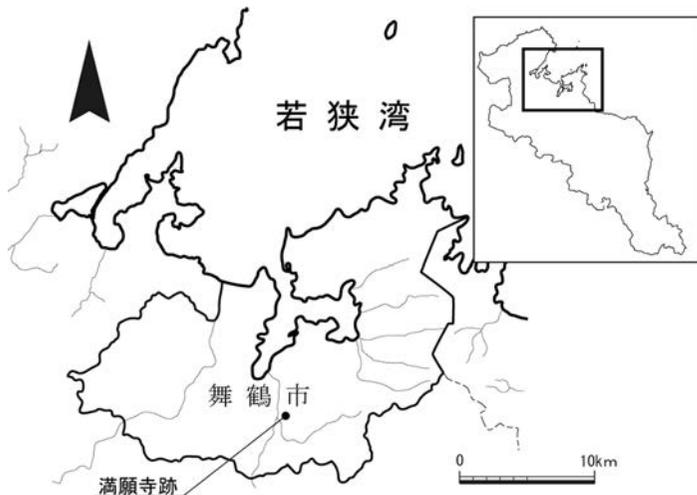
竹村 亮仁

1. はじめに

令和元年度に舞鶴市満願寺跡の発掘調査を実施した。発掘調査では、平安時代から鎌倉、室町時代の礎石建物跡や貿易陶磁器などが出土した。中でも、白磁壺類や北方系の貿易陶磁器が含まれており、その搬入経路に一考の余地がありそうである。本論では、在地外の遺物を抽出し、日本海貿易を視野に検討を進めていく。

2. 満願寺の来歴

満願寺は、舞鶴市万願寺に所在している(第1図)。現在では江戸時代に再建された十一面観音菩薩座像を本尊とする観音堂と裏庫が残されている(写真)。満願寺は建保年間(1213~1219)に弁円上人によって創建され、創建当初は七堂伽藍で、多数の僧坊などが備わった寺院と伝わる。その後、永禄年間(1558~1570)に焼失し、山崎神社の棟札には、慶長12(1607)年に奥之坊があったことや寛文年間には円隆寺の宥宣院主が堂宇を再興し、天和3(1617)年に開帳供養されたとされている。現在の観音堂は昭和44(1969)年に移築されたものである。満願寺周辺には「西ノ坊」・「上ノ坊」などの地名が残り、調査区から南西180m付近で山門の礎石と考えられる石が確認されている。正確な記録は残っていないが、十一面観音菩薩座像の膝裏に墨書されている「建保六年 建立」が建立時期の根拠である。



第1図 満願寺跡位置図



写真 満願寺観音堂



第2図 遺構変遷図(1/400)

3. 発掘調査成果からみる満願寺

満願寺跡の発掘調査では、狭小の谷部に4棟の礎石建物跡を確認した(第2図)。4棟の建物跡は、並存していたわけではなく、立替を行っている。最下層の礎石建物S B22は、検出状況から礎石が原位置を保っているものと考えられ、柱間寸法概ね4尺が基準の建物である。平面形式は不明である。時期については、山岸常人氏からは建築史の立場から平安時代まで遡らないと所見をいただいている。一方、礎石建物S B22の火災後の整理時に掘削された廃棄土坑S K28から磁州窯黒釉壺や白磁、土師器などが出土している。黒釉壺の製作年代は1160から1320年、白磁四耳壺は11世紀末から12世紀代、土師器の生産年代は平尾編年5 B並行期と概ね12世紀の年代観を示す。また、礎石建物S B22を覆う炭化物層から出土する遺物には常滑3型式の甕や磁竈窯系黄釉鉄絵花文盤など12世紀代の遺物が多い。さらに炭化物層から出土した炭化米塊の年代については、放射性炭素年代測定により1217～1266年の年代値が示されている。50年の時間幅があることから一概に指摘はできないが、重要な年代値と考えることができる。建物の時期は12世紀後半から13世紀初頭と考えたい。建物の性格であるが、僧坊の可能性が高い。中層で確認した礎石建物S B03・15は同時期に隣接して建てられたと考えられる。礎石の並びの傾きがやや異なることや柱間寸法が異なること、検出高の違いから別棟の建物と考えられる。同一面で検出した埋甕S X51外面の炭化物の年代が、1225から1275年を示していることや遺物の年代から13世紀前から中ごろに据えることができる。礎石建物は狭小の谷部に併存し、石組溝によって

区画されている。狭小の谷部に2棟の建物が併存する事例が、時期は新しくなるが、和歌山県根来寺でも確認されている。出土遺物に六器や華瓶のような土器製仏具と考えられるものが含まれることや貿易陶磁器類についても使用痕が多く認められることから、生活と修行の空間が一体となった僧坊の存在が考えられる。整地層からは食膳具が多く認められることから、生活空間としての性格が強いのと考えられる。上層の礎石建物S B02は規模が小さくなり、柱間0.9m程度の建物である。出土遺物が少なく、時期の特定が難しいが、13世紀中ごろ以降に比定することができそうである。建物の性格であるが、本堂などの可能性が高い。

満願寺の調査成果は以下のようにまとめることができる。^(注1)

- (1) 狭小の谷部で繰り返し、立替を行っている
- (2) 12世紀後半に建立され、14世紀までには衰退している
- (3) 建物の性格が変化している(僧坊(生活空間)→僧坊(生活空間+宗教的機能)→本堂)
- (4) 同じ僧坊でも、機能が異なっている可能性がある

4. 出土遺物と生産地

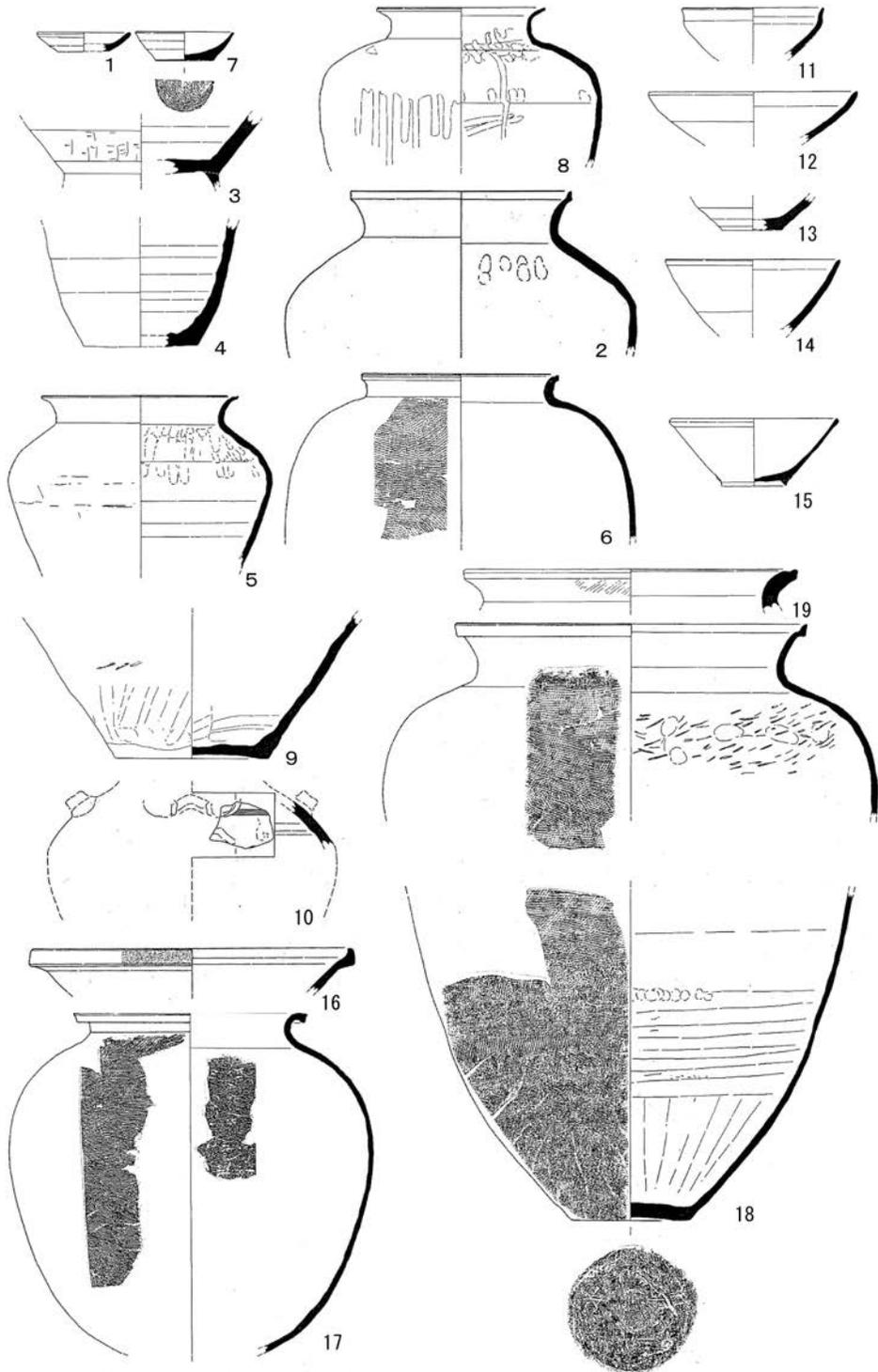
満願寺跡の発掘調査では、整理箱60箱の遺物が出土している。約9割が土師器である。土師器はすべて在地で生産されたもので、礎石建物S B22段階では丹後地域でよくみられる強いナデの残る土師器が中心であるが、礎石建物S B03・15段階以降では、都の影響を受けたと思われる土師器の割合が多くなる。土師器については地域色が強くなる傾向があるため、陶磁器を抽出し、京都以外の地域から持ち込まれた製品を見ていくことで、生産地を消費地の関係と物流について考えてみたい。

(1) 国内製品

国内で作られたと考えられるものは、東海系、東播系などの製品がある(付表1・第3図)。まず、東海系製品は、尾張、常滑、古瀬戸などがある。信楽焼や越前焼、丹波焼など明確に判断できるものはない。第3図に主要なものに示し、記す。1

付表1 国内陶磁器一覧

	器形	生産地	遺構・層位
1	山茶碗	尾張	土坑SK28
2	甕	常滑	SK51
3	壺	常滑	第21層
4	捏鉢底部	常滑系	第21層
5	甕	常滑	第21層
6	甕	常滑	第21層
7	山茶碗	尾張	炭化物層
8	甕	常滑	炭化物層
9	鉢	常滑系	炭化物層
10	四耳壺	古瀬戸	第11層上層
11	天目茶碗	古瀬戸	第11層
12	椀	古瀬戸	第20層
13	椀	古瀬戸	第20層
14	平椀	古瀬戸	第21層
15	山茶碗	東美濃	第21層
16	鉢	東播系	第11層上層
-	鉢 口縁	東播系	第21層
17	甕	東播系	第21層
18	大甕	東部山陰系	土坑2SK51
19	甕	不明	第21層



第3図 満願寺遺跡出土国内陶磁器(2・6・8・17・18は1/10、その他1/6)

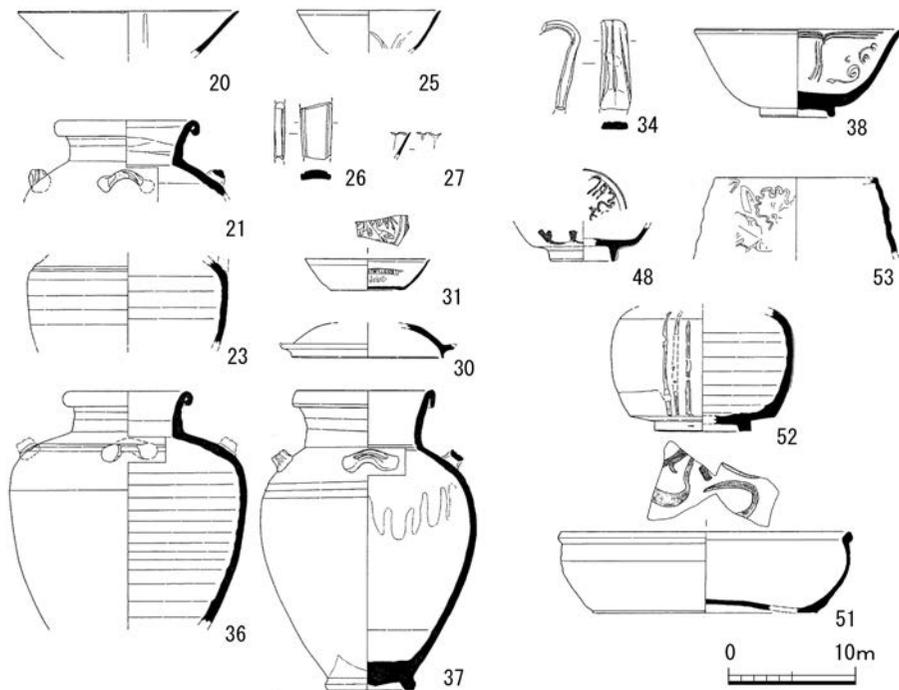
は常滑の山皿である。底部は糸切で、内面には火災の影響か、自然釉が泡状に残る。藤澤編年の5型式並行期(13世紀初頭)のものと考えられる。6・9は常滑の甕で、6は5型式(13世紀中ごろ)、9は3型式(12世紀後半)のものと考えられる。出土層位からすると、6は、整地層第21層、9は第21層下層の火災後の炭化物層から出土していることから、寺院の火災時期を示す資料と見ることができる。10は古瀬戸の四耳壺である。13世紀中頃のものであろう。15は東美濃系山茶椀である。口径1cm、器高5.7cmを測る。東美濃白土原の製品と思われ、13世紀中ごろに位置づけることができる。18は詳細な産地は不明であるが東部山陰系の須恵器甕である。口径49.6cmを測り、胴部一部欠損しているため、推定にはなるが、器高は80cm近くなる大型の製品である。^(注2)

(2) 輸入陶磁器

44点の貿易陶磁器が出土している。うち図化できたものは34点である(付表2)。ここでは代表的なものを16点掲載し、記す(第4図)。20は白磁輪花椀である。口縁部の輪花の表現、浮文はかなり粗雑である。21は白磁四耳壺の口縁から肩部、口縁端部は丸く折り曲げる。肩部はなだらかであることから、卵型胴部へと続くと考えられる。四耳壺Ⅲ-1類、11世紀後半から12世紀のものある。23に比べて肩が張ることや把手剥離痕跡から白磁水注と考えられる。白磁四耳壺と並行する時期と考えられる。いずれも福建系の白磁である。25は白磁椀である。直口縁で内面に劃花文が施される。26は白磁水注の把手の一部である。23とは釉薬の色調が異なることから別個体である。把手側両脇に並行する沈線が認められる。27は白磁の輪花小皿である。30は白磁蓋である。31は越州窯系白磁杯Ⅲ類である。38は龍泉窯系の青磁椀である。内

付表2 貿易陶磁器一覧

器種	器形	生産窯	出土地点
20	白磁 輪花椀		礎石建物SB03
21	白磁 四耳壺		土坑S X25
22	白磁 四耳壺		土坑S X26
23	白磁 水注		土坑S X27
24	白磁 水注		土坑S X28
25	白磁 描花文椀	景德鎮	土坑SK28
26	白磁 水注 把手		土坑SK28
27	白磁 輪花皿		第11層上層
28	白磁 椀		第11層
29	白磁 椀		第20層
30	白磁 壺 蓋		第21層
31	白磁 皿		第21層
32	白磁 椀		第21層
33	白磁 椀		第21層
34	白磁 椀		炭化物層
35	白磁 椀		炭化物層
36	白磁 四耳壺		炭化物層
37	白磁 四耳壺		炭化物層
38	青磁 劃花文椀	龍泉窯系	土坑S X 25
39	青磁 椀		第11層上層
40	青磁 椀		第11層上層
41	青磁 椀	龍泉窯	第20層
42	青磁 水注把手		第21層
43	青磁 椀の底部	龍泉窯	第21層
44	青磁 椀		第21層
45	青磁 小椀		炭化物層
46	青磁 椀		炭化物層
47	青磁 皿		第21層
48	青花 椀	福建諸窯	第11層上層
49	褐釉 盤		第21層
50	青白磁 皿	景德鎮	炭化物層
51	鉄絵 盤	磁窰窯系	炭化物層
52	黒釉 白堆線文 壺	磁州窯	土坑SK28
53	不明 香炉		第21層



第4図 満願寺跡出土貿易陶磁器

面には飛雲文が施される。口縁端部には輪花はない。太宰府編年 I - 4 a 類で、12世紀中頃から後半のものであろう。34は白磁水注把手である。36・37は白磁四耳壺でⅢ - 1 類ある。48は青花椀である。明代のものと考えられる。51は磁竈窯系黄釉鉄絵花文盤である。52は、磁州窯黒釉白堆線文壺である。外面に白泥で線文を施し、その後施釉をする。把手がつく可能性もあるが、剥離痕は確認できないため、壺として報告する。马萌萌編年によると第2期、12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられる。^(注3) 53は香炉である。胎土は精微で、草花文が浮でる。釉薬は光沢が弱く、重たい印象である。

貿易陶磁器の多くは白磁であり、出土傾向を見ると、下層に壺類などの良品が増える。点数が少ないこと一概には言えないが、この傾向は、遺構の性格によるものと考えられることができる。

5. 満願寺周辺の状況

満願寺の位置する西舞鶴市沿岸に舞鶴国際埠頭が整備され、中国やロシアとの海の玄関口の1つとなっている。中世段階での西舞鶴市域の状況はどのようなものだったのか見ていく。市域全域では、平安時代末期には、大内荘、志楽荘などが成立する。『丹後国諸荘園郷保惣田数帳』によると、市域全体で荘園や郷が成立して、西舞鶴は田辺荘、大内荘に

あたると考えられる。『東寺百合文書』には「寄進 所領大内郷事 在丹後国管 伽佐郡内 四至 東限丹後国何鹿郡八田上林 西限田辺郷堺子午仟佰并赤前山 南限丹波国八田郷堺三俣谷 北限余部堺方神山并倉橋郷堺(後略)。」と記載されており、田辺郷との境は^(注4)検討が必要だが、満願寺跡周辺は大内荘に属していたと考えられる。大内荘は、寿永3(1184)年に平辰清から八条院女房の弁局に寄進されている。このことから満願寺周辺には、少なからず平家と影響があったものと可能性がある。

6. 周辺遺跡の状況

(1) 大川遺跡(舞鶴市)

大川遺跡は由良川河口から、約8kmの左岸に位置し、遺跡西側には延喜式式内社である大川神社がある。発掘調査で弥生時代以降の遺構が確認されている。大川遺跡の概要と出土傾向を記載する。伊野が2018年に簡潔にまとめている^(注5)。それによると、大川遺跡では、最も北に位置するA地区で、12世紀後半ごろまで鍛冶工房が機能しており、その後、13世紀になると、大川神社の門前に位置するC地区に活動の中心が移るとしている。また貿易当陶磁器の出土傾向からは、白磁壺、青白磁小壺、合子などの嗜好品が多く、居館などの痕跡が認められないことから、一時的な保管場所、すなわち交易港としての機能を有していた可能性が高い。また京都模倣型土師器皿や東播系、常滑、貿易陶磁器などを保有しているが、多くは、回転台土師器皿であり、生活形態は一般的な集落に近いとしている。貿易陶磁器が多く認められる点については、「流通拠点」として捉えることで、解消できる。

(2) 難波野遺跡・中野遺跡(宮津市)

両遺跡は、名勝天橋立により外海から切り離された阿蘇海に面した遺跡である。難波野遺跡は古墳時代から中世までの遺跡群である。「府中」と呼ばれる地域に位置しており、碁盤目状の地割が認められ、13世紀ごろに地割が形成されたと考えられている。また、題籤軸や漆器が出土しており、国府や籠神社との関係も指摘されている。また出土する輸入陶磁器は12世紀から13世紀代のものが中心で、白磁椀、青白磁合子などが出土している。出土している遺物をみると、港湾都市のような様相が認められないが、遺跡の立地やそれ以前の遺跡の様子からみて、交易拠点としての性格はもっていたものと考えられる^(注6)。

中野遺跡では、出土遺物などから国分尼寺と考えられている。平安時代から室町時代には、越州窯系・龍泉窯系などの青磁や、建窯系の天目碗、白磁など中国産の陶磁器が多く出土しており、博多から続く交流の拠点だったと考えられている^(注7)。

(3) 福井県

舞鶴市の東に位置する福井県の貿易陶磁器の出土状況を確認する。白山平泉寺、木崎遺

跡、鐘島遺跡などで良好な貿易陶磁器が出土している。平安時代末から鎌倉時代では、白磁碗、龍泉窯系青磁碗などが多く、同安窯系青磁は、出土遺跡、数量が限定的であるとされている。食膳具以外の貿易陶磁器は、拠点的な遺跡に多く分布している。^(注8)

(4)山ノ下遺跡(倉吉市)

鳥根県倉吉遺跡では平安時代末期から鎌倉時代の底を備える大規模な建物跡が見つっており、同地域を治めた小鴨氏の屋敷跡として指摘されている。平安時代末ごろには規則性をもって配置されており、大型の建物が造営されている。その後、規則性をもって配置された建物は造営されなくなり、一般的な集落へと変わる。出土遺物には京都系土師器皿や畿内系瓦質鍋などがあり、その形や製作技法などから畿内との共通性が指摘されている。貿易陶磁器では、白磁、青磁のほか、越州窯水注、天目碗などが確認されている。^(注9)

7. 交易ルートの推定

日本海貿易では、主要経路として、山陰ルート、瀬戸内ルート、九州東岸域ルートなどが指摘されている(第5図)。丹後半島から西へ進む航路が示され、北陸から博多を結ぶ航路の中心に出雲美保関があったとしている。また山陰側では、内海水運や河川水運、内陸交通が一体となって交易活動が行われていたと指摘されている。^(注10)

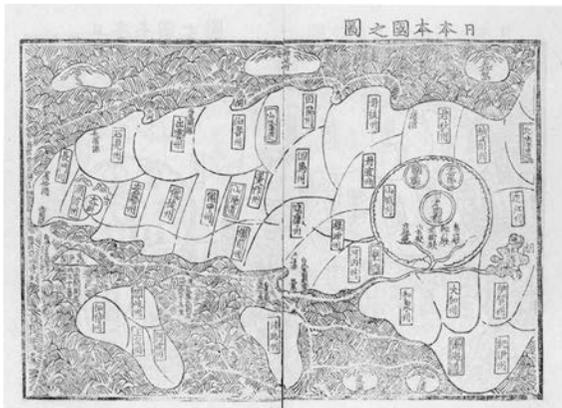
1471年に朝鮮通信使申叔舟により書かれた『海東諸国記』所載の「日本国之図」(第6図)



第5図 出土貿易陶磁器生産窯と中世航路推定図
(伊野2018に加筆)

には当時の航路が記載されており、「小浜浦」という記載が認められ、そこから西にむかって、航路が描かれている。精度や信憑性などは議論の余地があるが、博多から小浜へむかう航路があったことを示す資料といえる。

西からの航路が京都府沿岸のどこに付くのか。『海東諸国記』には丹後半島と思われる地形の前に「大河」とある。交易船から目印になるものと推定すると、兵庫県円山川とみることがができる。円山川であるとするならば、久美浜を交易拠点として、京都における日本海側の交易が始まると考えられる。その後、経ヶ岬を越えて、丹後



第6図 『日本国之本圖』（『海東諸国記』より）

半島の付け根付近に航路は示される。着岸地点としては宮津市と考えられる。周辺では、国分寺跡や難波野遺跡、中野遺跡などがあり、貿易陶磁器が多く出土している。その後は、栗田半島を越えて、由良川にたどり付くと考えられる。由良川を遡上し、貿易拠点と考えられる大川遺跡に着岸する。ただし、大川遺跡は河口から8キロ上

流に位置していることから、河口付近に津となる拠点が存在した可能性がある。また由良川を利用し、福知山など内陸部と交流が、水運、陸路で行われていたものと考えられる。由良川から以東について、舞鶴湾を経由するものとそのまま小浜方面に進むものにルートが分かれるものと考えられる。舞鶴湾は若狭湾のさらに内海であることから良好な湾港として機能する可能性がある。現在においても国際埠頭として機能している。満願寺跡で出土している貿易陶磁器を再度確認すると、白磁壺、水注、黒釉壺などの良品がある。このことは、港などの存在を示唆しているのではないか。伊佐津川を利用した交易は、大川遺跡同様に内陸部、綾部などに続く陸路などとして機能していたのだろう。

8. おわりに

本論で、満願寺跡での調査成果を基に、中世日本海交易、特に京都北部地域について簡単に考えてみた。京都北部における貿易陶磁器の搬入事例と主として検討を進めた同時期



第7図 北都京都における交易経路推定図

の港湾都市や大川遺跡のような交易拠点となる発掘事例が少ないことから、不明瞭な点が多い。周辺地域の状況や大川遺跡、中野遺跡や難波野遺跡など貿易陶磁器の出土状況からみて、満願寺で出土した貿易陶磁器についても京都など南から搬入された可能性は低く、山陰ルートと呼ばれる航路を通じて持ち込まれたものであろう。また壺類や京都や博多で出土例の確認できない黒釉壺が持ち込まれたことは当時の満願寺の興隆を示し、その背景に平家との繋がりがあった可能性も考えられる。今回の検討では、京都北部沿岸域に発掘調査事例が少なく、根拠に乏しい推察となってしまった。今後の課題として、内陸部の遺跡を合わせて考えることで、この推察を補強していくことが可能であろう。

(たけむら・かつひと = 当調査研究センター調査課主任)

- 注1 竹村亮仁2021「満願寺跡 第2次」『京都府遺跡調査報告集』第181冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注2 陶磁器の編年については、日本中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』による。
- 注3 马萌萌「黒釉凸線紋瓷器初探」『中国国家博物館刊』中国国家博物館
- 注4 平辰清寄進状案『東寺百合文書』(京都府立京都学・歴史館 東寺百合文書WEB)
- 注5 伊野近富2018「京都府北部中世前期の土器・陶磁器―流通の中継地点と荘園館」『中近世陶磁器の考古学』第八巻 雄山閣
- 注6 引原茂治『難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡平成18・19年度発掘調査報告』京都府遺跡調査報告集 第128冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注7 東高志2002「第4章 律令国家の展開と丹後」『宮津市史』通史編上巻 宮津市史編さん委員会
- 注8 阿部来2015「中世前期における越前若狭の輸入陶磁器」『中世前期における輸入陶磁器とその流入』発表要旨・資料集 (公財)石川県埋蔵文化財センター
- 注9 小口英一郎ほか2022『山ノ下遺跡Ⅱ・平ノ前遺跡Ⅱ』(公財)鳥取県教育文化財
- 注10 市村高男2004「中世西日本における流通と海運」『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 注11 申叔舟1931「日本国之図」『海東諸国記』朝鮮総督府